

三山木ミュージアム

～文化によるまちづくりの可能性～

同志社大学 今川ゼミ B

三山木と聞いてどのようなことをイメージするだろうか。私たちは、この三山木に注目し、三山木における政策を提言することにした。

政策

三山木ミュージアム ～文化によるまちづくりの可能性～ を提案する。

問題提起

三山木のイメージとして、治安が悪い、同志社の下宿先である、急行が止まらない、車の牧場になっている、などの意見があったが、一番多かったイメージとして、「三山木には何もない」ということがわかった。(今川ゼミ B 調べ)

そのようなイメージが持たれる原因としては、以下のようなことがあげられるのではないかと。

三山木が知られていないこと、治安が悪いこと、三山木のまちづくりにおける VISION が達成されていないこと等。

なぜ文化？

三山木は、文化学術研究都市である京田辺市にあり、歴史や伝統などの文化が多く残るところである。実際、三山木には、かつて山本駅という馬の休憩所があり、深い歴史が残っている。また、山本駅朝市やかぐや姫竹フェスタといった、住民が参加する催しも開かれており、文化の発達が期待できるのである。また、同志社大学が近くにあり、三山木を大学への一つの玄関口として指定していること、学生及び学生の様々な活動といった文化資源が豊富なことも注目すべき点であるといえる。

施策

文化創造：学生と住民により、文化を新たに作り上げること。

文化発掘：眠っている三山木の文化を再発見すること。

文化継承：消えそうな三山木の文化を後世に伝えていくこと。

文化発信：三山木の文化を広く、伝えていくこと。

事業

●文化イベントの開催〔文化創造〕

地元住民や学生の文化的発表の場である文化イベントを開催する。これは、文化活動をする人々の発表の場であるとし、地元住民と学生による文化創造を狙う。また、その練習場所として、三山木駅を開放し、文化創造活動を進める。その際、文化イベントへの出店を行政に登録することにより、三山木駅前があふれかえることを防ぐ。

●三山木の文化再開発〔文化発掘〕

三山木の歴史や文化はまだ認識がされていないのが現状である。そういった文化を同志社大学考古学研究所な

どの歴史サークルや地元住民が共同で調査し、三山木の文化における再開発を進める。

●かぐや姫と竹フェスタの継続と、山本駅朝市との交流〔文化継承〕

継続困難なかぐや姫と竹フェスタを年1回の地元住民と学生の交流の場として開催する。

その際、山本駅朝市を出店してもらい、地元住民との交流を図る。

●学生が主体となったPR活動〔文化発信〕

同志社には、京田辺キャンパスで4年間活動する文化情報学部がある。この学部の新たな研究活動の拠点として、文化情報学部による三山木の文化発信を行っていく。また、三山木駅の街灯に同志社の旗を飾ることや、花で同志社大学の校章を作ることにより、三山木を「学生のまち」としてPRする。

実現性の根拠

実現性の懸念があるのはやはり、「そのようなイベントを開いて、人が集まるのではないか。」というのではないだろうか。そのことに対して一つの回答が以下のことである。平成17年実施の三山木に住んでいる住民へのアンケートや私たちのインタビューによると、住民と学生「駅前広場でどのようなことができればよいか？」という問いに対して、学生と住民のどちらも、「ミニコンサート、朝市などのイベントの実施」が一番多い。また、私たちのインタビューの結果、学生と住民のどちらも「やってみたい」といった、肯定的な意見がほとんどであった。

このことから、住民と学生のどちらもやる気があり、意欲的に取り込んでくれることがわかる。

効果

1. 文化という**コンセプト**が生まれ、三山木のまちづくりとしての統一性がはかられ、よりよい街づくりにつながる。
2. 駅前を練習場所として開放することで、人がいる時間が増える。このことにより、三山木の**治安の問題が解消**に近づく。
3. 三山木の文化を再発見することにより、学生のみでなく、住民も**三山木の魅力が再認識**される。
4. 住民と学生が交わる空間を造ることにより、**住民と学生の交流**が生まれる。さらに、コミュニケーションが生まれることにより、**治安の向上**も期待できる。
5. 文化的な取り組みを伝えることや「大学のまち」をPRすることにより、**イメージの向上**が図れる。

まとめ

以上、三山木ミュージアム ～文化によるまちづくりの可能性～ を述べてきた。この政策は、住民・学生・行政が協力し合うことにより、初めて政策が実現される。住民は自主的な行動を、学生は積極的な参加を、行政は双方の意見をとりえながら、ミュージアムの成功と三山木の**Vision**の実現に向けての行動が求められる。このことがきっかけになり、三山木がより文化的に発展することを期待する。